

## 京 発掘むかしばなし - 杉山信三氏に聞く -

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

1996年、研究所は設立20周年を迎えました。先生は初代の所長として京都の発掘に携わってこられました。それ以前の現場の思い出、苦労話などを、聞かせていただきたいと思います。

戦前の発掘調査は少なかったが、昭和24年1月の法隆寺金堂壁画の焼失がきっかけとなり、25年に文化財保護を強化するため、国宝保存法から文化財保護法に切り替えが行なわれ、埋蔵文化財にも注目され、学術を目的とした発掘調査が行なわれるようになったのです。

いろいろと調査をしてきましたが、まず思い出すのは、平安京造営と時を同じくして、平安京南端の地に東寺と朱雀大路をはさんで対称の位置に創建されたという「西寺跡」の調査です。

唐橋小学校の北側に西寺児童公園がありますが、35年6月にその東部に防火水槽をかねたプールの建設計画が持ち上がり、夏までに間に合うように工事を進めていたそうです。

礎石が発見されると校長を通じて京都府の文化財保護課に報告があり、工事を一時停止してその礎石を含む遺跡の調査を行なうように私に連絡が入ったのです。この工事が夏までにできなければ学校に迷惑がかかるため、8日間で発掘・実測・写真撮影と急いで調査

し、それが東僧坊跡の一部であることがわかりました。

校長先生も保護課へ連絡をされた事で、児童が大切か、遺跡が大切かで両者に挟まれ大変だったでしょうね。結果として西寺跡の復元によって大きな功績となり、そしてプールもでき上がったわけですが、西寺跡の調査で、他にどのような発見があったのですか。

35年に東僧坊跡を発掘し、37年に公園の北側畑地で食堂とその南門、いわゆる食堂院跡の規模を知ることができ、その冬に金堂・回廊・南大門などの建物の位置も確認できました。

45年に今度は小学校内にプールを建設することになり、この調査で築地遺構の基部と判断できる遺構を検出できました。このような築地を廻らせた建物群が存在したとすれば、おそらく、東寺西南部

の灌頂院かんじょういんのようなものがあつたと思われます。

47年に校舎の老朽化が著しいことから新校舎への建て替えの為の調査を行ない、中門と回廊を検出できました。そして、秋に小学校の北側でガレー建設の申請があり、小子房と推定されるため調査を行なうことになり、これも2間幅の細長い建物とわかりました。

49年に校舎の改築をせまられ、旧校舎は金堂跡に建っていて、それ以外の地での移転が必要で、遺構の破損を避けて位置と規模を決定するための調査を行ない、この調査で中門の東南角と東回廊南辺が中門にとりついた状態を探り得、また階段のあり方も知ることができた痕跡も発見できました。

これらの一連の調査による成果から、西寺全体の中心線を確定できました。そして東寺の中心線と



現地説明会の杉山信三氏 昭和59年 鳥羽離宮跡第97次調査 金剛心院跡

にらみあわせると羅城門の中心線も確定でき、平安京を復元していく大きな手がかりがつかめたのです。

『東宝記』の東寺創草事には「…**建立東西両寺於羅城門之左右**…」とありますが、これらの調査で早くから火災により廃絶した西寺が朱雀大路を中心にして東寺の伽藍配置と対称的な存在であったと立証できたわけですね。

まだまだ思い出はありますが、30年代になって名神高速道路を敷設する計画が発表され、いくつかの遺構をこわすことが予想され、道路公団と交渉して、京都府を通じて具体的な話になってきた、その中の一つが「鳥羽離宮跡」の調査です。

先生はどのようにして、鳥羽離宮跡の調査を進めていかれるお考えだったのですか。

まず、広い地域を実測し、鳥羽離宮の概念をとらえることでした。国道1号線が鴨川を渡る橋の南のたもとに立って、一面に広がる植え付け前の田を前にして、西は秋の山のある小枝の集落、南はすぐ前に城南宮の森、東には安楽寿院を含む茂った森などがぼっかりと浮かんでいる島のように見え

る。その中に離宮がある。これをどのように調査すればよいか、すぐには考えがうかばなかったのですが、『平家物語』の中に「池の辺を見まはせば、秋の山の春風に、白波しきりに折かけて、紫鴛白鷗せうようす」とあることから、付近に池のあることを証明できれば、その汀をたどることによって庭、庭から建物跡へと進めていけばよいのではと考えました。

今でも鳥羽周辺は不便ですが、その当時はもっといろいろと不便だったでしょうね。

現場がはじまり、ベースキャンプが必要になり城南宮さんの社務所の一部を使わせていただいたこともありました。朝、作業衣に着かえ現場へ、昼食をとりに戻りまた現場へ、と1日2往復国道1号線を横断するのです。その頃は横断歩道の印も歩道橋もなく、手を挙げれば自動車が止まってくれて、ゆっくりと歩いて渡ったのんびりした時代でした。

現在の場所に事務所が定まったのはいつ頃ですか。

調査のたびにテントや仮設物は作りましたが、作業員達が昼食をとる程度のもので、調査員の詰所・遺物の格納・野帳や図面・書類の

倉庫にもなる建物が必要になってきた結果、安楽寿院境内の一部を市の文化財保護課から交渉してもらい、プレハブを建て「鳥羽離宮跡調査研究所」と名づけ、48年から51年まで利用しました。

そして京都のあちらこちらで発掘の件数が多くなり、保護課は調査する研究者を合体させ、財団法人を設立することを指示し、51年11月1日をもって(財)京都市埋蔵文化財研究所を発足させたのです。そして、鳥羽離宮跡調査研究所も吸収され、現在この地は鳥羽の調査基地となっています。

鳥羽の地を手がけて早や35年がたち、調査も140次を数えました。朱雀大路へと続く鳥羽の作道を境にして、東側の鴨川との間には、御所や御堂が建ち並び、広大な池がその前面に造られ、西側の桂川との間には諸公卿の邸宅などがあつたろうと予想できるようになりました。まだ調査が行なわれていないところもあり、今後の調査に期待をしています。

本日は貴重なお話、ありがとうございました。お元気で、今後もよろしくご指導をお願い致します。

\*先生は11月に満91歳を迎えられました。(聞き手 小倉万里子)



第1次調査地遠景 昭和35年 名神京都南インター予定地(南から)



田中殿の調査 昭和35・36年 背後の森は城南宮(北西から)